庄内協同ファームだより

No.146 2013年7月号

●農事組合法人●
庄内協同ファーム

発 行/
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
http://www.shonaifarm.com

今年も鴨が来ました。去年より3日遅れです。

今年も大雪だったのに雪解けが早く、平年より少し遅れるくらいで雪はなくなりました。播種は順調に終えましたが、その後の低温により、かなり生育が遅れ田植え時期が心配されました。それに雨続きで田んぼの耕起ができず作業が遅れ、いつになったら田植えができるのか気をもめる日々でした。近年ゲリラ豪雨、爆弾低気圧等、異常気象というような天気が多くあります。温暖化の影響なのでしょうか。

その後天気は回復し田植えが終わり鴨を入れる準備です。カラス除けにテグスを張り、キツネやタヌキなどの動物除けに電気柵を張り、それでも足りずに夕方には手製のランプを灯し、いよいよ鴨を放す準備です。去年はこうした準備にも関わらず、かなりの数の鴨が外敵に襲われいなくなってしまいました。かわいそうでなりません。今年はこうしたことが無いように念入りに準備しました。鴨を田んぼに放した日は、天気がよく、寒さで衰弱する事はありませんでした。外敵にも襲われずに、順調に仕事をしています。毎朝、餌をやりに私が田んぼに行くと走って寄ってきます。餌をやらない時も寄ってきてピーピーと餌をねだります。黙ってみていると、鴨もこちらを見ます。可愛いものです。今年はこのまま無事でいてほしいものです。

私たちはこうして、安全安心なものを作っています。ただ、今国で進めているＴＰＰが始まったら、この農村はどうなるのでしょうか。米の値段がこれ以上下がったら、稲作をやっていく人がいるのでしょうか。それでなくとも農業をやる若い人が少なくなっています。私の集落では農業をやっている若い人は一人もいません。

また、今になって農業の所得を倍にするといっています。稲作で倍の所得を上げる為には規模拡大しなくてはなりません。私の集落に一人か二人しか稲作農家はいらなくなります。その他の人は何をするのでしょうか。みんな勤めに出て、便利のいい都市近郊に移ってしまったら、農村の過疎化が更に進むのではないかと、心配です。

月山、鳥海山の間にある青々とした田んぼ、この風景がいつまでも続くことを願っています。

監事　**廣井　嘉治**

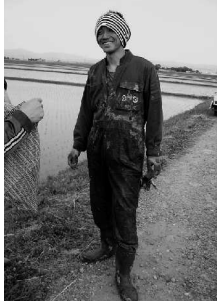
田植え交流をしました

五十嵐良一

私達、庄内協同ファームとJＡ庄内たがわで、「つや姫」の有機栽培など産直に取り組んでいる生産者で組織された「庄内産直ネットワーク」での田植え交流会が、消費者を迎え5月26日に開催されました。

まちとむらを結ぶこの交流で消費者である都会の生協の組合員さんと「庄内産直ネットワーク」の会員である私達が田植え、稲刈りの農作業体験を通して、環境や農業、食の在り方を考え、互いに共有し理解を深めてきました。

私達農家にとっては、生産されるお米を食べる人たちと同じ時に同じ場で同じ仕事ができ会話することは、楽しく、うれしく、とても幸せな気持ちになります。そして、その笑顔は秋までの米づくりに励みとなります。本当に有意義な時を感じます。



6年目を迎えた今年は、初めて鶴岡市のお祭り「天神祭（通称ばけものまつり）」にあたり、街中でのイベントを見学し、お神酒を頂いた方もいて最初から盛り上がりました。

大瀧会長より、山形県の新品種「つや姫」を皆で一緒に植え、たくさん食べて下さいとの挨拶がありました。また、昨年より庄内協同ファームの新組合員で圃場担当となった小野寺代表の息子、紀允（のりまさ）君より「つや姫」の品種の特性、有機栽培のやり方、苦労、植え方など詳しい説明の後、型枠を田面に転がし、印をつけて田植えを開始しました。

早朝から4時間余りの長旅の疲れを見せず、歓声を上げ、賑やかに、ぬかる田んぼでの作業。庄内に惚れ込み毎回来て下さる方、親子での参加の方、定年後の夫婦の方、生協の若い女子職員、役員、そして生産者も子連れや若い後継者、経験豊富な父ちゃん、母ちゃん、文字通り老若男女入り混じり50名あまり。2時間足らずで作業の完了。緑色となった田に入水。あとは稔りの秋まで紀允君にお任せ、夜の懇親会で近況を語り、腰の痛みも和らげながら、再会を誓いあう田植え交流となりました。

さあ、今年も「田んぼの生き物調査」を始めよう!!

志藤正一

6月、田植えを終えた田んぼは苗の緑が日に日に濃くなり、秋の実りに向けて元気に育ち始める。この季節、田んぼの中に目を向けるとオタマジャクシやカエル、ドジョウ、アメンボなどの生き物たちでにぎわい始めているのがわかる。特に農薬を控えたり（特別栽培）、使わない田んぼ（有機栽培）はその数や種類が桁違いに多いのに気づく。

私たちは10年ほど前から田んぼにはどんな種類の生き物がどれ位いるのか調べてみようと思い立ち、「田んぼの生き物調査」を始めた。普段目にする畔や水中の生き物だけでなく、ミミズやユスリカ、貝類等土の中の生き物も調べることで、土つくりと田んぼの生き物が密接に関係していることを知ることができた。生産者や消費者にとっては土つくりのメカニズムを知る契機に、また地域の子供たちにとっては地域の農業や環境を楽しく学ぶことができる機会として「田んぼの生き物調査」が広がっている。

今年も仕事の合間に田んぼに入り、じっくりと田んぼの生き物を観察しよう。私たちが長年続けてきた土つくりや環境にやさしい農業への努力の結果を確かめるために。

商品紹介

夏にはやっぱり むぎちゃん

庄内協同ファームの「むぎちゃん」は原料に「シュンライ」という大麦を使用します。

この大麦はいつ栽培されているのか皆さんご存知でしょうか。

米といえば春から秋へということはなんとなくお分かりでしょうが、大麦はちょうど米が収穫された後、秋から初夏にかけて栽培されます。つまり越冬するわけです。

寒い冬を乗り越え、6月の中旬に大麦が収穫されます。6月というと梅雨のイメージが強いですが、ここ庄内では、梅雨に入る前の晴れた6月中旬に収穫が行われます。

収穫前は、まさしく黄金色に輝いた大麦畑を見ることができます。越冬したその力をまるで誇示するかのような見事な黄金色です。

今年も“黄金の麦畑”から採れた大麦を焙煎した麦茶「むぎちゃん」をお届けします。

今流行りのティーパック方式ではなく、昔ながらの方法で煮出して作る麦茶です。

若い方には面倒に思われるかもしれませんが、一度飲んでみれば、面倒どころか出来上がりを待ちわびながら作れること請け合いです。

老若男女問わず大好きな麦茶。庄内協同ファームの麦茶は、いつもの麦茶を更に上品にしたような、甘く香るワンランク上の麦茶と自負しております。ぜひともご賞味下さい。

ビールのお供に だだちゃまめ ちゃまめくん

昔から、在来作物として受け継がれてきた「だだちゃまめ・ちゃまめくん」。食欲を誘う強い香り、そしてとうもろこしのような口の中で広がる甘みと旨み。美肌・若返りに効果的な成長ホルモンの分泌促進の役割を果たしている「オルニチン」。枝豆には、そのオルニチンが多く含まれ、なんと「シジミ」の3倍～5倍もあるといわれています。

我が家では、10年より前から、豆がら堆肥、米糠などを使った自家製発酵ボカシ肥料で土作りを行っており、草や天気と闘いながら、循環型農業、有機栽培で育てております。

今年の天候は、晴れの日が多く、水分不足で枯れてしまうのではないかと、心配されましたが、太陽の恵みをたくさん受けて順調に育っております。

早生品種の「小真木」から晩生品種の「尾浦」まで十種類の種を自家採取にて継承しており、7月下旬から9月中旬まで、時期によって色々な味を楽しめます。

是非、お試しください！

TPP参加は危険！6・1反対学習会に参加して

菅原孝明

平成の開国と称した参加表明は内容を知る度に、かつての不平等条約締結に他なりません。（国民の食・医療安心安全よりも外国企業の利益を優先する国家の主権を脅かすISD条項等々）既に合意済みの条項は全て受け入れなければならず、29分野の全体の80パーセントが決まっています。サービス分野では100パーセント決定しているそうです。

舟山やすえ氏（米国におけるTPPに関する実情調査団副団長）の訪米調査報告

米国では農業分野において日本が『国民的合意の下』で市場開放を決断したと理解受け止められて、「例外はない」という米国と『聖域なき関税撤廃』が前提でない日本との認識の大きな違いがありました。また、二国間協議で日本自ら輸出自動車の関税猶予期間の提示・輸入数量の増加・米国の保険と競合しない約束をするなど日本の守るべき国益は何なのか定かではないとの報告もありました。

ローリー・ワラック氏

（米・パブリック・シチズン国際貿易監視部門ディレクター）

米国でも国内産業を空洞化するTPPは反対運動が盛んであるとの報告がありました。日本への問いかけ、「何もメリットがないのになぜTPPに参加するのか聞きたい」との言葉が印象的でした。

いつまで日本は米国のポチでいつづけるのでしょうか？
NO!と言えない日本に国民の生活は守れない。
参加撤回の決断は今です！

ペンリレー 徒然草

芳賀和子

今日も朝から夏のようなさわやかな青空が広がっています。残雪の月山や鳥海山がくっきりと見えます。暑くなりそう。

枝豆の植え付けがまだまだ終わらないのに、何日も雨の降らないこの天気は大変です。ましてや乾いた東風が一日中、夜も強く吹いています。4月中旬から早生種から随時植えつけてきた枝豆、晩生種の尾浦、5号の作業がこれからなのに。耕すと土ぼこりが舞うような圃場に、ハウスで芽を出した小さな苗に水をたっぷりと吸わせて、植えつけていきます。この天気に負けじと、すぐにホースを引いて水をかけるのですが、かわいそうなくらいしおれている苗もあり苦戦しています。作業が遅れてしまった分、直播にしたいのだけど、これから植える圃場に、キジが3羽、冠高い声を出し歩き回っているし、鳩も何羽か先回りしています。ここにおいしい枝豆の種を播けば、あっという間に彼らの胃袋に収まってしまうでしょう。もう少し、もう少し、手伝ってくれる隣の元子さんと2人馬力、手作業でがんばって植えつけるしかありません。

玉川寺の庭園

夫は鴨が多すぎて、稲の間を歩き回り草だけつぶしてくれればいいのに、稲もつぶして大きなプールが出来始めたので、30羽ほど引き上げて、タヌキか何かの被害にあった方の田んぼに分けていました。

まとまって雨が降ったのは5月30日、この日、村のお祭りや公民館掃除で協力している隣組のお母さん達9人で、花の寺として知られている「玉川寺」へ行ってきました。公民館掃除で村から頂いた軍資金を持ち、九輪草が咲いたよと、地元のニュースで流れていたので行ってきました。雨に煙る杉木立の中、山門を入るとピンクや白の九輪草やツツジが咲いています。本堂から大きな池を眺めながら、おいしいお菓子と抹茶も頂いてきました。昔、田植えが終わると早苗振りといい、村全体で休み期間を決め、ゆっくりと体を休める習慣がありました。今は、その家それぞれに直播や、我が家のように紙マルチ田植えで、やっと5月29日に終えたりと、早苗振りの習慣はなくなりましたが、お母さんたちとゆっくりと流れる時間を楽しんできました。

86歳の義母もそうですが、皆さん、自家用の畑に次々と作物を植え、家の庭の手入れをし、腰が曲がっても、膝が痛くても、年をとったのだから当たり前、と、体をいたわりながら、作業しています。私も、あと10年くらいはこのままの仕事量をこなせるか。

まあ、機械に頼りながら、続けて行きたいなあ。

余力でお庭の花の手入れも出来たらいいなあ。

野菜おじさん

猫の額よりも更にもっと狭いところで、にわか家庭菜園を行っております。

今までは夏野菜の定番みたいな、ナス、トマト、をメインにピーマンやらオクラ、つるむらさき、モロヘイヤなどなど。（何を栽培するか農家に聞いたところ収穫後も次から次と実のなる野菜が良いんじゃないのとアドバイスがあったので）

使用する資材は生産者向けに共同購入で斡旋している肥料を使用し、一応無農薬、無化学肥料による栽培に挑戦しております。しかし、生産者のように、有機農業のプロではありませんので、害虫にやられたり、土壌の成分に偏りがある為、ちゃんと生育し、市場にあふれているような見た目の良いものにはあまり出会った事はありません。まあ、身内で食べる分については全く問題ないのですが、隣り近所に配る場合はなんとなく考えながら配っております。今年は、予てより植え付けしたかったキャベツに挑戦しました。案の定、害虫にやられ今はほとんどの葉が食い尽くされアオムシの為に栽培したような感じになりました。害虫対策の農薬を使いたいが・・・。もう少し我慢してみるか。向いの小学生からは、「野菜おじさん」というニックネームを貰い、今年も野菜づくりに励んでいます。（好）

あとがき

地元ではちょっとだけ知られている松山に登り夕陽を眺める。5月の中旬くらいから始まった田植えもようやく一段落を迎えた。山から見下ろす庄内平野、最上川、夕陽、日本海。この山から見る景色は、普段のせわしない日常から一瞬解放させてくれる。

庄内平野の田圃が鏡面となる5月下旬、赤い太陽が田圃に一筋のラインをひいて、徐々に空と海全体を赤く染めて日本海へ沈む。夕方に霞みがかかることが多くて、なかなかはっきりと日本海に沈む瞬間は見せてもらえない。ほんの15分くらいの出来事だけど、すごく安らぐひと時。一度は見てほしい夕陽スポットだ。

よく晴れた日の夜、山から見上げる星空と眼下に広がる庄内の夜景。自然の星と電気の光、全然違うものだけどどっちもキレイ。

今は稲が育ち、光り輝く水面が緑の絨毯へ変わりつつ夏に向かっていることを教えてくれる。7月の半ばになれば真っ暗な田圃の中で蛍が小さな瞬きを見せてくれる。

今年の夏も暑いかな。

（月）